



Title	束縛と孤独：イメージスキーマで読み解くOwenの“S.I.W.”
Author(s)	大森, 文子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 19-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/62107">https://doi.org/10.18910/62107</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 1. はじめに<sup>1</sup>

2016年11月4日に開催された言語文化レトリック研究会秋季セッション「戦争詩人 Owen を読む」は、第一次世界大戦における兵士の苦難を描いた戦争詩人 Wilfred Owen をめぐって、文学者、歴史言語学者、認知言語学者がそれぞれの学術的立場、研究姿勢に基づき多角的に分析するセッションであった。まず霜鳥慶邦准教授が、Owen の詩の言語の持つ、時代や民族や宗教を超える普遍性について論じ、次に渡辺秀樹教授が、Owen の複数の詩に見られる兵士の微笑に着目し、特に“The Last Laugh”における戦死者の微笑と「死」の残酷な高笑いの対比をメタファーの観点から論じた。続けて筆者（大森）が、“The Last Laugh”と内容的に関連の深い作品“S. I. W.”を選び、この詩の意味の構造について認知詩学の見地から考察した。

本稿では、当日の発表内容に基づき、認知言語学の重要概念であるイメージスキーマ（Lakoff 1987, etc.）や概念メタファー（Lakoff and Johnson 1980, Lakoff 1987, etc.）を分析の枠組として採用し、戦時下の兵士を取り巻く物理的、社会的環境と、その環境が兵士の心理と行動にどのような影響をもたらすかに着目しながら、この詩の主人公の兵士にかかわる描写から読者が読み取る意味の構造を明らかにしたい。

## 2. “S. I. W.” のテキストと翻訳

本節では、“S. I. W.”のテキスト本文と、その翻訳案を記す。

S. I. W.

I will to the King,  
And offer him consolation in his trouble,  
For that man there has set his teeth to die,  
And being one that hates obedience,  
Discipline, and orderliness of life,  
I cannot mourn him.

W.B. YEATS<sup>2</sup>

### I. THE PROLOGUE

Patting good-bye, doubtless they told the lad  
He'd always show the Hun a brave man's face;  
Father would sooner him dead than in disgrace,—  
Was proud to see him going, aye, and glad.  
Perhaps his mother whimpered how she'd fret  
Until he got a nice safe wound to nurse. 5  
Sisters would wish girls too could shoot, charge, curse ...  
Brothers—would send his favourite cigarette.  
Each week, month after month, they wrote the same,  
Thinking him sheltered in some Y.M. Hut, 10  
Because he said so, writing on his butt

<sup>1</sup> 本研究は JSPS 科研費 JP16K02766（基盤研究（C）、研究課題名「英語メタファーの認知詩学」）の助成を受けたものである。

<sup>2</sup> このエピソードは、Yeats の戯曲 “The King's Threshold” からの引用である。この作品は、Seanchan（Shanahan と発音するとの指示がある）という名の詩人を描いた戯曲である。王宮の会議に列席を許されていたこの詩人が、他の議員の不満を慮った王により議会から追われ、その人事に抗議して王宮の玄関で断食して死を待つ。この抗議をやめさせるために詩人への説得を試みるよう頼まれた僧侶の言葉。Yeats, W. B. (1922) *Plays in Prose and Verse* (London: Macmillan), p. 94 参照。

Where once an hour a bullet missed its aim  
 And misses teased the hunger of his brain.  
 His eyes grew old with wincing, and his hand  
 Reckless with age. Courage leaked, as sand 15  
 From the best sand-bags after years of rain.  
 But never leave, wound, fever, trench-foot, shock,  
 Untrapped the wretch. And death seemed still withheld  
 For torture of lying machinally shelled,  
 At the pleasure of this world's Powers who'd run amok. 20

He'd seen men shoot their hands, on night patrol.  
 Their people never knew. Yet they were vile.  
 'Death sooner than dishonour, that's the style!'  
 So Father said.

## II. THE ACTION

One dawn, our wire patrol  
 Carried him. This time, Death had not missed. 25  
 We could do nothing but wipe his bleeding cough.  
 Could it be accident? - Rifles go off...  
 Not sniped? No. (Later they found the English ball.)

## III. THE POEM

It was the reasoned crisis of his soul  
 Against more days of inescapable thrall, 30  
 Against infrangibly wired and blind trench wall  
 Curtained with fire, roofed in with creeping fire,  
 Slow grazing fire, that would not burn him whole  
 But kept him for death's promises and scoff,  
 And life's half-promising, and both their riling. 35

## IV. THE EPILOGUE

With him they buried the muzzle his teeth had kissed,  
 And truthfully wrote the Mother, 'Tim died smiling'.

## 自傷

私は王様のところへ行きましょう。  
 災難にあっておられる王様をお慰めしましょう。  
 あそこにいるあの男は、歯を食いしばって死ぬ気になっていますから、  
 恭順も、自制も、規律正しい生活も、  
 いやだという男ですから、  
 あの男の死を嘆く気にもなれません。

W. B. イェイツ

## I. 序

武運を祈ると優しく背中をたたき、おそらく皆、この若者に言ったのだ、  
 お前はいかなる時もドイツ兵どもに勇者の顔を見せつけてやるのだらうと。  
 父親は、生きて恥をさらすくらいならば死になさい、  
 お前の出征を見送るのを誇りに思うよ、そうとも、嬉しいよ、と。  
 母親はたぶんめそめそ泣いたかもしれぬ。私は気が気じゃないよ、

お前がうまいこと軽い負傷で帰って来てくれるまではと。  
妹達は、女の私達も、撃って、突撃して、苦しめてやればいいのにと。  
弟達は、兄貴の好きな煙草を送るよと。  
毎週、毎月、身内は手紙に同じことばかり書いた。  
彼がどこかのキリスト教青年会の兵舎の中で守られていると思い込んで。  
なぜなら彼がそう書き送ったのだから、銃の台尻の上で書いた手紙で。  
実は彼のいた場所では、一時間に一度は弾丸が彼をかすめて飛び、  
何度も外れる弾丸は飢餓状態の彼の頭脳を苛んだ。  
彼の眼は萎縮して若さを失い、彼の手は  
マラリア熱のため向う見ずになった。どんなに丈夫な砂袋でも、  
長年の雨に濡れればそこから砂が漏れ出すように、勇気が漏れ落ちていった。  
しかし、休暇も、負傷も、熱も、塹壕足炎も、ショックも、  
この気の毒な若者を捕まえてはくれなかった。死も、  
機銃掃射に倒れる苦悶は後にとっておくつもりらしかった。  
錯乱状態に陥った世界の列強のお気に召すままなのだ。

彼は何度も見た、兵士たちが夜警の折に自らの手を撃つのを。  
故郷の人々は知る由もないことだった。しかしその姿は恥ずべきものだ。  
「恥をかくより死を、そうだよな！」  
お父さんはそう言ったのだもの。

## II. 闘

ある日の明け方、我らの鉄条網警備兵が  
彼を運んできた。今度ばかりは、死は彼を逃さなかった。  
我らは彼が吐き出した血をぬぐってやることしかできなかった。  
事故なのだろうか？銃の暴発ということもある…  
狙撃されたのでは？いや、違う。（後になって英国軍の弾丸を発見したのだ。）

## III. 詩

それは彼の魂が考えに考えた末の転換点だった。  
この先ずっと続く、逃れられない束縛の日々、  
破ることのできない鉄条網、視界を塞ぐ塹壕の壁、  
その周りには弾幕砲火、めらめら地を這い頭上を覆う炎、  
ゆっくりと体をかすめる炎、全身を焼き尽くしたりはせず、  
死の約束と嘲笑、生の中途半端な約束、死と生の攪乱のために  
彼を生殺しにする炎、そんなものすべてを覆すための。

## IV. 結

戦友たちは、彼の歯が口づけした銃口を彼とともに埋葬し、  
誠意を込めて彼の母に手紙を書いた、「ティムは微笑みながら逝きました」と。

この詩テキストについて、渡辺秀樹教授より次のような指摘があった。引用(1)(2)が示すように、5行目に登場するTimの母親は“his mother”と表記されているが、3行目、7行目、8行目、24行目に登場する父親、姉妹、兄弟たちは、“Father,” “Sisters,” “Brothers”と表記され、“his”はついていない。また5行目とは対照的に、最終行では引用(3)のように“his”のつかない“the Mother”の形で表記されている。これには何か特別な意味があるのだろうか（以下の引用で太字と下線を用いた強調はすべて筆者による）。

- (1) **Father** would sooner him dead than in disgrace,—  
 Was proud to see him going, aye, and glad.  
 Perhaps **his mother** whimpered how she'd fret  
 Until he got a nice safe wound to nurse.  
**Sisters** would wish girls too could shoot, charge, curse ...  
**Brothers**—would send his favourite cigarette. (ll. 3-8)
- (2) “Death sooner than dishonour, that’s the style!”  
 So **Father** said. (ll. 23-24)
- (3) With him they buried the muzzle his teeth had kissed,  
 And truthfully wrote **the Mother**, “Tim died smiling”. (ll. 36-37)

この疑問については、次節でこの詩についての分析を行なった上で考察する。

### 3. Tim を取り巻く環境

この詩では、英国兵 Tim の戦場での経験と死の経緯が描かれている。Tim を取り巻く環境について整理し、彼の経験と心理状態について考察する。

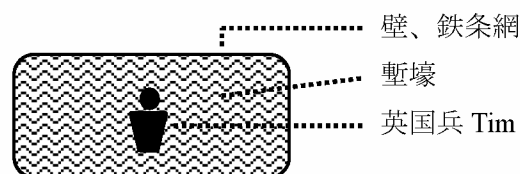
#### 3.1 Tim を束縛する空間

本詩は I から IV の 4 部構成となっている。まず手始めに、彼の死の直接的な要因について述べた第 III 部から観察する。

Tim が身を置いているのは戦闘が繰り広げられている戦場で、鉄条網で守られた (wired) 塹壕 (trench) に彼は隠れている。塹壕の壁は視界を遮り (blind trench wall)、鉄条網は破ることができない (infrangibly wired)。この塹壕の様子は、引用 (4) に記されている。

- (4) It was the reasoned crisis of his soul  
 Against more days of **inescapable thrall**.  
 Against **infrangibly wired and blind trench wall** (ll. 29-31)

言うまでもなく、壁と鉄条網は、敵の攻撃を防ぎ、自軍の兵を守るためのものであるが、中にいる兵士にとっては、壁を越え、鉄条網を破ることは命を危険にさらすため不可能であるので、守ってくれると同時に自らを拘束し、行動を制限するものに他ならない。塹壕は溝の形態をしており、物理的には壁を四方にめぐらせた密室というわけではないが、命の危険にさらされた状況では、兵士にとってそこに身を置くことは密室に監禁されていることに等しい。この詩が描写する Tim の認識をイメージスキーマとして図示すると図 1 のようになる。(イメージスキーマとは、身体経験に基づいて形成される抽象的な心的表象である (Lakoff 1987 etc.))。ここでは、主人公 Tim の経験についての詩の記述の背景にあると読者が想定する図式的認知構造を指す。) Tim は鉄条網の張り巡らされた塹壕という言わば<閉塞空間>に拘束された者として自らを認識している。Tim が感じている閉塞感とは “inescapable,” “infrangibly” という語に示されている。ここでは<塹壕は密室である> (A TRENCH IS A LOCKED ROOM) というメタファー認識が成立している。【図 1】は、このメタファーの根源領域である<密室>を図示したものである。



【図 1】 Tim に対する束縛のイメージスキーマ (1)

なお、Owen の作品には、塹壕の形状が具体的に描写されたものがある。

- (5) Cramped in that funnelled hole, they watched the dawn  
Open a jagged rim around; a yawn  
Of death's jaws, which had all but swallowed them  
Stuck in the bottom of his throat of phlegm.  
("Fragment: Cramped in That Funnelled Hole," ll. 1-4)

引用 (5) では、塹壕が「漏斗状の穴」(funnelled hole) と描写されている。<sup>3</sup> この漏斗的形状は、中にいる兵士にとってはその頭上は解放空間であり、物理的には密室とは異なる。また、(5) では兵士たちが死の顎 (death's jaws) に飲み込まれたも同然で、その喉の奥 (in the bottom of his throat) で身動きできなくなっているという、肉食動物とその餌食に喩える比喩が働いているところが独特である。しかし (5) では“cramped”や“stuck”という表現があることから、身動きできないという束縛のスキーマが働いているという点では引用 (4) と共通していることがわかる。

### 3.2 Tim を束縛する空間：2 層目

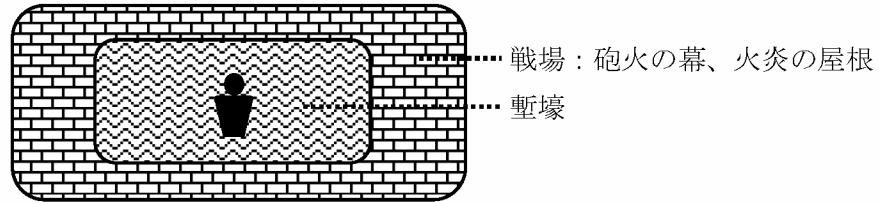
Tim に対する束縛の構造は上記の内容にとどまるものではない。塹壕の外は、敵の射撃が絶え間なく続き、弾丸が飛び交い火炎に満たされた戦闘空間である。

- (6) Where once an hour a bullet missed its aim (l. 12)
- (7) It was the reasoned crisis of his soul  
Against more days of inescapable thrall,  
Against infrangibly wired and blind trench wall  
**Curtained** with fire, **roofed in** with creeping fire, (ll. 29-32)

彼のいる場所では、引用 (6) が示すように一時間に一度は弾丸が彼をかすめて飛ぶ。引用 (7) に見られるとおり、敵からの射撃は幕を張った (curtained) ような大規模なもので、いわゆる弾幕砲火である。地を這うように地面すれすれを飛ぶ砲火 (creeping fire) が、塹壕に隠れる Tim の頭上をまるで屋根のように覆っている (roofed in)。幕と屋根は空間を閉鎖する機能を有するものであるから、砲撃の炎を幕と見立てる“curtain”と、屋根と見立てる“roof”は、攻撃対象を身動きさせなくする束縛を表すメタファーである。これらは＜戦場は密室である＞(A BATTLEFIELD IS A LOCKED ROOM) というメタファー認識を反映する表現となっている。このメタファー認識を形作っているのは【図 2】に示したイメージスキーマである。塹壕と、その外の戦場という二重の空間が Tim を取り囲み、束縛している。

---

<sup>3</sup> BBC News Magazine のサイト (BBC News Magazine 25 February 2014 (<http://www.bbc.com/news/magazine-25776836>)) では、第一次大戦当時の前線の塹壕はきわめて劣悪な環境で、長時間滞在すると部隊の士気が急速に下がる (“Front-line trenches could be a terribly hostile place to live. Units, often wet, cold and exposed to the enemy, would quickly lose their morale if they spent too much time in the trenches.”) との説明があり、当時の塹壕の写真が掲載されている。写真の中央下から右上の方向に、兵士が斜めになって銃を構えている様子が見え、塹壕の断面が、引用 (5) の描写と同様の、上が広く底がすぼまった漏斗状になっているのがわかる。なお、漏斗のイメージはダンテの『神曲』の地獄の描写に依拠する (ダンテの地獄については渡辺秀樹教授より教示を得た)。ダンテの地獄は、漏斗状の大きな穴の形で、底の部分は地球の中心に達している。この穴は 9 層の構造になっており、犯した罪が重いほど、下の方に落とされる。『神曲 (上) 地獄』(ダンテ著、山川丙三郎訳、岩波文庫) 参照。漏斗状の地獄の最下部ではルチーフエロ (魔王) が半身を氷に埋められている (第三十四曲)。前掲の渡辺論文の注 3 に記された通り、“The Last Laugh” 最終行の毒ガスの音を表す hissed からは蛇が、蛇からは Adam と Eve に原罪を犯させた Lucifer が連想される (Trane DeVore 准教授の指摘)。塹壕を漏斗の形と見なす Owen のものの見方が、彼の複数の詩において、戦場から地獄、さらに悪魔への強い連想を喚起することは興味深い。



【図 2】 Tim に対する束縛のイメージスキーマ (2)

この＜閉塞空間＞は、Tim の心身に特殊な作用と効果を及ぼす。

- (8) Where once an hour a bullet missed its aim  
And misses teased the hunger of his brain. (ll. 12-13)
- (9) Slow grazing fire, that would not burn him whole  
But kept him for death's promises and scoff,  
And life's half-promising, and both their riling. (ll. 33-35)
- (10) His eyes grew old with wincing, and his hand  
Reckless with ague, Courage leaked, as sand  
From the best sand-bags after years of rain. (ll. 14-16)

引用 (8) (9) が示すように、敵の砲撃は塹壕の中にいる Tim の精神をからかうように苛む (tease) ものである。<sup>4</sup> 飛んでくる弾丸は何度も外れ (once an hour a bullet missed its aim)、その炎は全身を焼き尽くすようなことはなくゆっくりと体をかすめる (slow grazing fire, that would not burn him whole)。絶え間なく続く死の恐怖のため、引用 (10) に示されるように Tim の勇気はそがれ (courage leaked)、彼の目は若さを失って萎縮してしまう (wincing)。この様子が、引用 (9) では死と生の擬人化により表されている。死は今すぐに Tim の命を奪うわけではなく、生殺しの状態に留め、＜閉塞空間＞に束縛された彼を弄ぶように嘲笑する (death's promises and scoff)。また生は、中途半端な約束をしてくる (life's half-promising)。つまり、今この瞬間の命は保証するが、一時の予断も許さないという約束のしかたである。

このように死と生に翻弄され、なぶりものにされるような閉塞空間は、中にいる人間にとってはいたたまれない空間であるが、そこから脱出することはできない。ただし実は脱出できる場合があり、仲間の兵士の中には、引用 (11) に挙げられている休暇、負傷、熱、塹壕足炎、ショックという理由で隊列を離れた者もいた。しかし Tim にはそのような機会は訪れない。このような偶発的な事象を望むことができないとすれば、非常手段に訴えるしかない。つまり、引用 (12) に記されているように、自らの手を撃って傷つけ、戦力外となるという方法である。

- (11) But never leave, wound, fever, trench-foot, shock,  
Untrapped the wretch. (ll. 17-18)
- (12) He'd seen men shoot their hands, on night patrol. (l. 21)

### 3.3 Tim を束縛する空間：3 層目

しかし、Tim にとっては自ら負傷するという方法も許されなかった。許さなかったのは父の「恥をかくより死を、そうだよな！」という言葉である (引用 (13))。

<sup>4</sup> Owen の “Insensibility” と題する詩でも、兵士に襲いかかってくる爆撃を「からかうもの」として捉えており、その視点は引用 (8) と共通している (And some cease feeling / Even themselves or for themselves. / Dullness best solves / The tease and doubt of shelling, (“Insensibility,” ll. 12-15))。

(13) “Death sooner than dishonour, that’s the style!”  
So Father said. (ll.23-24)

戦場では、上記のような入れ子型の二重の閉塞空間により Tim は二重の束縛を受けているが、さらにその周囲を取り巻く 3 層目の閉塞空間が存在する。父をはじめ、家族や知り合いの住む故郷である。引用 (14) から (18) では Tim が出征するときに故郷の人々が彼にかけた言葉が記されている。

(14) Father would sooner him dead than in disgrace,—  
Was proud to see him going, aye, and glad. (ll. 3-4)

(15) Sisters would wish girls too could shoot, charge, curse; (l. 7)

(16) Brothers—would send his favourite cigarette. (l.8)

(17) Patting good-bye, doubtless they told the lad  
He’d always show the Hun a brave man’s face; (ll. 1-2)

(18) Perhaps his mother whimpered how she’d fret  
Until he got a nice safe wound to nurse. (ll. 5-6)

引用 (14) が示すように、父は彼に「生きて恥をさらす (disgrace) くらいならば死になさい、お前の出征を見送るのを誇りに思う (proud) よ、そうとも、嬉しいよ (glad)」と言い、妹たちは (15) のように「女の私達も、撃って、弾を込めて、苦しめてやればいいのに」という願望 (wish) を口にし、弟たちは (16) のように「兄貴の好きな煙草 (favourite cigarette) を送るよ」と声をかけた。(17) が示すように、周りの人々は皆「お前はいかなる時もドイツ兵どもに勇者の顔 (a brave man’s face) を見せつけてやるのだろう」と彼を励ました。これらの発言からは、イギリス兵はいかなる時も勇敢で死をも恐れない、戦地では煙草を楽しむ余裕さえあり、敵を打ち負かすのは容易なことだという幻想を彼らが抱いていること、そしてそのような「勇者の顔」をもつ兵士を身内から出すことに対する彼らの矜持がうかがえる。彼らの考えは現実の戦場の悲惨さとはかけ離れた幻想なのだが、それが幻想であることを彼らは知る由もない。たとえ知らされても、それをありのままに受け止めることはできないだろう。それゆえ、Tim は戦場から郷里に宛てた手紙では、彼らの幻想と非現実的な自分への期待を砕くような戦地の現実を何も書くことができなかった。唯一、彼の母は彼の出征前に、引用 (18) のようにめそめそ泣きながら (whimpered) 「私は気が気じゃないよ、お前がうまいこと軽い負傷で帰って来てくれるまでは」言った。母だけは、命の危険にさらされる息子を心配して泣いてくれた。しかし、その泣き声を聞いたからには、なおのこと母を心配させるわけにはいかない。弱音を吐けない彼は、(19) のように、手紙の中で自分がキリスト教青年会の兵舎という安全な場所で守られている (sheltered in some Y.M. Hut)<sup>5</sup> という嘘までついて、彼らを安心させようとするのである。

(19) Each week, month after month, they wrote the same,  
Thinking him sheltered in some Y.M. Hut,  
Because he said so, writing on his butt (ll. 9-11)

出征前に Tim にかけた言葉と同じ言葉ばかりを何度も書き連ねる家族 (Each week, month after month, they wrote the same, (l. 9)) と、Tim との間の手紙のやり取りは、彼らの意識の隔たりをただ広げるばかりである。その隔たりは、戦場で苦しむ Tim をさらに苦しみ、孤立させるものとなる。塹壕に隠れ、常に死の危険にさらされ、絶え間ない恐怖に束縛され、そこから逃げるに逃げられないという苦しみを経験しているのは、Tim も、仲間の兵士たちも同じである。しかし、仲

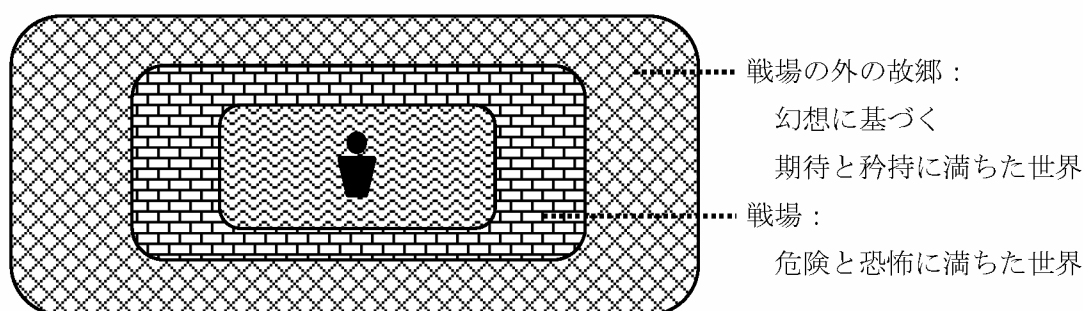
<sup>5</sup> 詩に記された “W. M. Hut” という語については、Owen Knowles が “a hostel for troops organised by the Young Men’s Christian Association” という注を記している (Knowles ed. 1999: p. 105)。



間の兵士たちがその束縛から脱出するために自らの手を撃つのを見たとき、Tim の脳裡には父の言葉が浮かび、彼らの自傷行為は彼の目には「恥ずべき」(vile) ものとし映らない(引用 (20))。

(20) He'd seen men shoot their hands, on night patrol.  
Their people never knew. Yet they were vile. (ll. 21-22)

戦場の外にいる家族の期待と矜持が、兵士の行動に関する倫理観、すなわち生き恥をさらす不名誉 (disgrace, dishonour) を認めない倫理観を形成する。その倫理観が兵士の行動を制限する束縛となり、自傷という手段で戦場の恐怖から脱出することができなくなるのである。そこにはく郷里の家族の期待と矜持は密室である> (ILLUSORY EXPECTATIONS AND PRIDE OF FAMILY MEMBERS ARE A LOCKED ROOM) というメタファー認識が働いている。



【図 3】 Tim に対する束縛のイメージスキーマ (3)

Tim に対する束縛のイメージスキーマは【図 3】のような 3 層構造を成す。この 3 層構造の各層がもつ機能を以下の【表 1】にまとめる。兵士を三重に取り囲み、逃げ道を奪うこのような入れ子型の閉塞空間のただ中で、Tim は孤立し、絶え間ない恐怖感に苛まれているのである。

【表 1】 Tim に対する束縛のイメージスキーマの構造と機能

構造	機能
1 層目 (塹壕)	兵士の命を守り、同時に行動の自由を制限する
2 層目 (戦闘空間)	兵士の命を脅かし、弄び、脱出を妨げ恐怖に陥れる
3 層目 (故郷)	幻想に基づく期待と戦場の現実から乖離した倫理観で兵士の行動の選択を狭める

### 3.4 束縛と無理解

ここで、第 2 節で示した疑問に立ち返りたい。本詩の 3 行目から 8 行目、および第 I 部の最終行で、Tim の父親 (Father) や兄弟姉妹たち (Sisters, Brothers) には“his”が付かず、母親のみが“his mother”となっているのはなぜか、という疑問である。前節で観察したように、恥ずかしい生き方よりも名誉ある死を求める父親、戦場で戦うことを羨ましがめる姉妹たち、戦地に煙草を送ることが兄を喜ばせることになると思い込んでいる弟たちの意識は、戦場で苦しみ怯える Tim の精神状態とは乖離している。3 層目の束縛スキーマの住人である彼らは、戦場の現実を何も理解せず、現実からかけ離れた幻想と期待と倫理観を抱くのみである。彼らがかける言葉は Tim を励ます意図で発せられたものであろうが、それは彼を束縛するものではあっても彼と相いれることはない。彼らを指す語に所有格“his”が付かないのは、父親も、兄弟姉妹たちも、Tim が「所有」する世界、すなわち彼が経験し、理解している現実世界には決して属さない外側の世界にいるからではないだろうか。所有格を伴わない“Father,”“Sisters,”“Brothers”という表記は、苦しむ彼の心情に寄り添うことなく戦場の現実と乖離した言葉をかけ、手紙を書き続ける彼らの無理解を象徴的に表すものであるように思われる。対照的に、母親だけは戦場の悲惨な現実を推測し、息子が生き

て帰還するかどうかを心配する言葉をかけた。母親のみが所有格が付いた “his mother” と表記されているのは、彼女が Tim の所有する世界に入り込んでくれた、あるいは少なくとも理解しようとしてくれた人物であることを象徴的に示すためではないかと考えられる。<sup>6</sup>

“S. I. W.” には前のバージョンがある。引用 (21) に示す。

- (21) Patting goodbye, **his father** said, “My lad,  
You’ll always show the Hun a brave man’s face.  
I’d rather you were dead than in disgrace.  
We’re proud to see you going, Jim, we’re glad.”

**His mother** whimpered, “Jim, my boy, I frets  
Until ye git a nice safe wound, I do.”

**His sisters** said: why couldn’t they go too.

**His brothers** said they’d send him cigarettes.

For three years, once a week, they wrote the same,  
Adding, “We hope you use the Y.M. Hut.”  
And once a day came twenty Navy Cut.  
And once an hour a bullet missed its aim.

And misses teased the hunger of his brain.  
His eyes grew scorched with wincing, and his hand  
Reckless with ague. Courage leaked, like sand  
From sandbags that have stood three years of rain.  
(“HE DIED SMILING,” an early version of “S. I. W.” (Lewis, ed., 1963, p. 76))

このヴァージョンでは、第1連の1行目で “his father” とあり、第2連では “his mother,” “his sisters,” “his brothers” と、家族にはすべて “his” がついている。英語としてはこれが自然な形である。“S. I. W.” の完成版では、Owen が意図的に “his” を削除したと考えられる。Tim の父親と兄弟姉妹に対する Owen の捉え方と、母親に対する捉え方の違いを明確に表現しようとする意図が働いたのではないかと思われる。

#### 4. 微笑と孤独

前節で観察したように、3 層構造の束縛にがんじがらめになり、苦しみ抜いた Tim は、とうとう閉塞空間から逃れる方法を見つけ出す。生き恥をさらす不名誉 (disgrace, dishonour) を許さず、誇りを重んじる父親の価値観 (引用 (13)、(14) 参照) にも抵触しない究極の脱出方法、自死である。銃口をくわえて死んだ彼を埋葬した戦友たちは、彼の母親に「ティムは微笑みながら逝きました (Tim died smiling)」と手紙を書く (引用 (22))。

- (22) With him they buried the muzzle his teeth had kissed,  
And truthfully wrote the Mother, “**Tim died smiling**”. (ll. 36-37)

銃をくわえて引き金を引くという悲惨な自死を遂げた Tim の死に顔が本当に微笑んでいたのだろうか。戦友たちが Tim の母に書いた手紙は真実だったのだろうか。息子を失った母親を慮るための嘘だということはないのだろうか。ここで、引用 (22) の 36 行目の描写に注目すると、銃口を指す “muzzle” には犬や猫などの動物の「鼻づら」という意味がある。Tim の行動を表す動詞として “kiss” が用いられていることから、この表現には「愛犬の鼻づらにキスするように、愛用す

<sup>6</sup> 戦場の中と外との乖離、相いれない関係性は、Owen の “Exposure” という詩にも示されている。この詩では、瀕死の兵士達の魂が遊離して故郷の家へと向かうが、彼らの魂の安住の場所がそこにはないことが「鎧戸も扉もすべて閉ざされている」という描写で象徴的に表されている (Slowly our ghosts drag home: glimpsing the sunk fires glozed / With crusted dark-red jewels; crickets jingle there; / For hours the innocent mice rejoice: the house is theirs; / **Shutters and doors all closed: on us the doors are closed**-- / We turn back to our dying. (“Exposure,” ll. 26-30)).

る銃の口、すなわち銃口にキスをした」という比喩的意味があると考えられる（渡辺秀樹教授の指摘）。そうすると、Tim は自分の命を絶つために使おうとしている銃に「私の愛しい銃よ」とキスをし、銃に対する愛しい気持ちが微笑みとなって現れた、そして戦友たちは、Tim のその最期の表情について真実を手紙にしたためたということになる。引用 (22) の 37 行目で用いられている “truthfully” という副詞がそのことを物語っている。<sup>7</sup>

では、その微笑みは何を意味しているのか。逃げ場のない束縛をやっと逃れ、絶えることのない苦しみから解放されるという安堵を表すものであることが、この詩の読者には容易に推測できる。<sup>8</sup> しかし、“Tim died smiling” とのみ書かれた手紙を読む母親は、どれだけのことが理解できるだろうか。たとえ出征前に彼を心配した母親であっても、彼が戦地で経験した現実の詳細や、束縛から解放されるための自死であったことを推察することは不可能であろうから、おそらく他の家族と同様、戦場の外の価値観に沿った解釈をするしかないであろう。英国軍兵士として「勇敢」に戦い、「名誉の」戦死を遂げ、その立派な態度を自ら誇りに思うがゆえの微笑み、という解釈である。残された母親にとっては、そう解釈することがせめてもの救いであるとも考えられる。それがわかっているからこそ、戦友たちは誠実な態度を崩さぬまま (truthfully)、いかようにも解釈できる、意味の曖昧な “Tim died smiling” という文言を書き送ったのであろう。引用 (22) で、彼の母親を指す語が “the Mother” となっており、詩の冒頭では付いていた所有格 “his” がここでは付いていないことは示唆的である。祖国のため、故郷のため、家族のために命をかけて戦い、戦地の惨状に苦しみ、その本当の心情を誰にも、母親にさえも理解されることなく死にゆくしかない兵士の孤独が、最終行での “his” の喪失に象徴的に表されている。

## 参考文献

- Blunden, Edmund (1958) *War Poems 1914-1918*. London: Longman.  
Gavins, Joanna and Steen, Gerard. eds. (2003) *Cognitive Poetics in Practice*. London: Routledge.  
Knowles, Owen, ed. (1999) *The Poems of Wilfred Owen*. Ware: Wordsworth Editions.  
Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.  
Lakoff, George and Johnson, Mark (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.  
Lewis, C. Day, ed. (1963) *The Collected Poems of Wilfred Owen: Edited with an Introduction and Notes by C. Day Lewis and with a Memoir by Edmund Blunden*. London: Chatto & Windus.  
Stockwell, Peter (2002) *Cognitive Poetics: An Introduction*. London: Routledge.  
Yeats, W. B. (1922) *Plays in Prose and Verse*. London: Macmillan.  
大森文子 (印刷中) 「認知詩学」『認知言語学大事典』東京：朝倉書店。  
佐藤芳子 (1993) 『ウィルフレッド・オウエン研究第一巻：ウィルフレッド・オウエン戦争詩篇』東京：近代文藝社。  
佐藤芳子 (1993) 『ウィルフレッド・オウエン第二巻：論文および関連文献訳』東京：近代文藝社。  
霜鳥慶邦 (2013) 「＜第一次世界大戦世代＞不在の時代に：Carol Ann Duffy, ‘Last Post’ と傷の記憶／記憶の傷」『英文学研究』90: 1-17。  
ダンテ著、山川丙三郎訳 (1952) 『神曲 (上) 地獄』岩波書店。  
中元初美 (2013) 『現代英詩を読む—エリオット、オウエン、ラーキンの作品を中心に』広島：溪水社。

<sup>7</sup> 引用 (21) に挙げた “S. I. W.” の前のバージョンでは、タイトルが “He Died Smiling” となっていることから、作者 Owen が兵士の死に顔に浮かぶ微笑みという概念を重要視していたことがうかがえる。

<sup>8</sup> 本詩と深い関連を有する Owen の “Smile, Smile, Smile” に描かれる兵士の微笑については、前掲の渡辺論文で、そこには怒りや諦念も含めた複雑な意味があることが詳細に論じられている。